

ボランティア活動の社会的背景

—— ボランティア活動に対するいくつかの視角 I ——

富川 拓・湯川 宗紀・新矢 昌昭・大東 貢生

要 旨

この小論は、ボランティア活動を行う個人的な目的と現代の社会状況の変化との関連を考察するため、外国人支援ボランティア活動に対する調査に先立ちいくつかの分析のための視角を提示することにある。本稿においては、ボランティア活動に関する一般的な像（定義）や動機とボランティアを実際に行っている人々が抱く像や動機とのギャップ、人々がボランティア活動を継続できる／できない理由についてその社会的背景から若干の考察を行った。

1. はじめに

1995年の阪神・淡路大震災でのボランティア活動に対する注目以降、わが国のボランティア活動をめぐる状況には「ボランティア活動をする行為者」「ボランティア団体」「行政」それぞれの関係において劇的な変化がもたらされた。それは、各種統計でのボランティア活動をしてみたい人々の増加、NPO法の制定（1998年）、文部科学省・中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」（2002年）、行政や学校団体によるボランティアセンターの設立などに現れている¹⁾。こうしたボランティア活動に対する変化に伴う形で、ボランティア活動が個人や社会にもたらす変化についても様々な見解がなされるようになっていく。古くは「自発性」「無償性」「社会奉仕」などの言葉で語られてきたボランティアが、「楽しい」「自己実現」（金子 1992）といったボランティア、そして「社会参加」「社会変革」「公共性の主体」としてのボランティア（入江 1999）といった言葉でも語られるようになってきた。我々は、こうしたボランティア活動の変

化について、ボランティア活動を行う個人的な目的と現代の社会状況の変化との関連を考察するため、現在S県H市をフィールドとして外国人支援ボランティア活動、特に日本人ボランティアによる日本語教室に対する調査を行っているが、調査に先立ちいくつかの分析のための視角を以下に提示したいと思う²⁾。

2. ボランティア像と動機

ボランティア概念の定義では後述する3つの代表的なものが定着しているが、こうした定義と実際にボランティア活動を行っている人々の抱くボランティア像には乖離はないのだろうか。また抱いているボランティア像とボランティアに参加する動機は矛盾せず一致しているのだろうか。

ボランティア活動の基本条件として入江は「ボランティアの条件が列挙されるとき常に登場するのは、〈自発性〉・〈無償性〉・〈公益性〉という三つの条件である。この三つはどれが欠けても、その行為がもはやボランティアとは言えなくなるような不可欠の条件であるとともに、この三つがそろっていれば、それはボランティ

ア活動である、と言える十分条件になっていると思われる」(入江 1999:5)と述べている。また入江はこの十分条件に〈創造性〉〈先駆性〉〈発見性〉〈相互性〉〈ネットワーク〉〈継続性〉〈専門性〉などの理想条件を付け加えている。

昭和30年代まではボランティアということばが使用されることはなかった。「慈善」、「篤志」、「奉仕」、「有志」などの呼び方で現在のボランティアと同じような趣旨の活動を表現していたのである。その後カタカナことばとして定着したボランティアは「慈善」等と比較して「古くさくなく」「商業主義」を示さず、語感と自発性を示すという点で魅力的なことばであった。しかし同時にカタカナことばとして定着したことがボランティアという概念の「イメージの固定化」を困難にし、概念のふくらみを大きくしてしまっていたのである。カタカナのままでは直接その意味を示すことはできないため、漢字に置き換える等の方法をとる必要も出てきた(原田 2000:26-29)。そこでボランティアという概念の内容を示すために上記の〈自発性〉・〈無償性〉・〈公益性〉という言葉が使われるようになったのである。自発性とは「だれから言われてやるのではなく」自分から進んで行うことであるとされる。ボランティアの語源とされるラテン語の「ボランタス」は自由意志を意味する voluntas という言葉からできたもので、そこからボランティアと自発性の深い関係がわかる。この自発性は主体性を示す方法と捉えられている。ほかのさまざまな活動と比較して、ボランティアは主体性が顕著にみられる活動なのである(原田 2000:37)。私たちは日常生活における他の活動で自発性・主体性を発揮できない状況にあり、それらを満たすためにボランティア活動を行っているということになる。

無償性とは「物やお金をもらうことを目的としない」ことである。しかし通常の人にとって、

純粹に利他的な行為は、日常的な活動の一部としてではなく、たまたま自分にそういう機会が訪れたとき、結果としてそうしていたと気づくといった性質のものであり、日常の生活の社会関係の要素として人の行為を「モデル化」して考える場合には、われわれは必ず何かしらの「報酬」を期待して行動するものである(金子 1992:149)。物やお金を受け取ることは目的としないが「見返り」を受けることを人は期待するものなのである。

この際の「見返り」つまり「報酬」は人によって様々である。このことを金子は次のように述べている。

「その人がそれを自分にとって『価値がある』と思い、しかも、それを自分一人で得たのではなく、誰か他の人の力によって与えられたのだと感じるとき、その『与えられた価値あるもの』がボランティアの『報酬』である。ボランティアはこの広い意味での『報酬』を期待して、行動するのである」(金子 1992:150-151)

金子はボランティアが「報酬」を受けるプロセスを「つながりをつけるプロセス」と表現している。ボランティアする側とされる側の「つながり」が、助けるつもりが助けられ、与えているつもりが与えられたという感覚をもたらすのである。

公益性は「自分のためでなく」何かを行うことである。原田はボランティアの公共性により私的な生活を越え、人と人とのつながりが広くなると考え、市民活動や社会運動と関係づけている。その公共性ゆえにボランティア活動は「社会の閉塞状況」を打破るものとして期待され、「市民社会」を築いていくための基礎とされているのである(原田 2000:39-40)。

以上のような自発性、無償性、公共性は日常生活の他の行動にもあると考えられる。ではな

ぜ人々はボランティア活動を行うのであろうか。他の日常生活の場面では実現できない何かがあるからなのだろうか。ボランティア概念の定義は上記のように非常に多義的で捉えにくいものとなっている。このような状況でボランティア当事者がどのようなボランティア像を抱き、どのような動機に基づいて活動をしているかを把握することにより、人々がボランティア活動をする理由に迫っていきたい。

以下、先行研究におけるボランティア像とボランティア活動をする動機の分析を振り返る。ボランティア活動を行っている人々が抱くボランティア像に関して、大東（2002）は国際ボランティアに従事しているボランティア団体の構成員に面接、電話、手紙、FAXなどの方法で調査を行っている。この分析では当事者が抱くボランティアの定義が①自発性②無償性③関係性④目的志向性⑤日常性⑥奉仕性というグループに分けられることが明らかになっている。

入江はボランティア活動をその動機によって、①チャリティーのボランティア（他人のための道徳的行為）、②自己実現のボランティア（自分のための文化的行為）③社会参加のボランティア（社会のための公的な行為）という分析を行っている。

また興梠は以下のように動機を分析している。

「自分の発見」「人や未知の世界との出会い」「自分らしい生き方を探る」などの内発的動機（自己実現型動機）と、「人や社会の役に立つ」「社会人としての責任」という外発的動機（問題解決型動機）とに動機を分類し、この二つにボランティア活動に「貢献」と「学び」の両義的な意味を求める「互酬性」を加えている（興梠 2003：70-71）。互酬性とは外発的動機と内発的動機の両方を含むものといえよう。この互酬性とは、社会的には自分と他人との間に生じる「返礼」の相互行為のことを指す。普通、他人に何かをもらったり逆にあげたりするとき、その返礼として何かをあげたりもらったりする

ことが、社会関係の最も基本的部分には認められる。またこの互酬性は個人間にも集団間にも存在するものである。

このような分析を基に今回インタビューした中からCさんのケースをみていく。なお現在調査が継続中であるため詳細な考察は次の機会に行うこととする。

今回の調査対象であるボランティア日本語教室のCさんはボランティアはして当然のことと考えていた。これは大東の分析における日常性と考えられよう。またCさんはボランティアであるがゆえに活動時間を自分の自由に設定でき、無理な場合は断ることが可能であることもその魅力としていた。これは時間だけではなく活動内容の面でも同様であり、嫌なことはしないためボランティアをして困ることはないということであった。無償であり、自発性に基づいたボランティア活動であるため、行政、企業などの活動と比較して「気軽に」できると捉えているようである。また日本語を教えることは自分の勉強にもなり、ある意味目的達成でもあると述べていた。これは入江の自己実現のボランティア、興梠の内発的動機と考えられよう。

3. ボランティア活動を

継続できる理由・できない理由

阪神・淡路大震災では多くの若者たち（大学生）がボランティア活動を行った。外国人支援ボランティア当事者にも大学生などの若者たちが多い。なぜ若者たち（大学生）はボランティア活動を行うのであろうか。

大学生活とは、大学受験という人生のなかで大きな位置を占めるハードルを越え、ある者は親元を離れ新しい環境の中、これまで拘束されてきたものから解放されたかなりの自由を得て好き勝手ができるモラトリアム期間である。大学生活において、大学生たちは（どんな形にせよ）勉強をし学校の単位を取りサークルに入り

友達と語らいアルバイトをしコンパに行き卒論を書き就職活動もしなければならない。限られた時間内に詰め込まれたしなければならない多くのことや、やりたいこと。そのような生活をエンジョイし、充実した生活を送り続けていく人たちがいる。だがその反面、特別だった楽しみや忙しさが日常化し特別なものでなくなり、夏休みの終りのような毎日にウンザリしてしまう人たち、そもそも不規則な生活や人との出会いや関わり合いにうまくなじめなかった人たちも当然いる。忙しくもあり、退屈でもある大学生活に、わざわざボランティア活動をする余裕がどうしてあるのだろうか。

『学生のボランティア活動に関する調査』（財団法人内外学生センター 1998）によると³⁾、ボランティアができない理由として「大学の時間が忙しい」（20.5%）、「活動に要する技術や知識がない」（19.2%）、「情報が不足している」（16.9%）、等があげられている。また、アルバイトとボランティア活動のどちらを優先するか、という問いに対しては「どちらかと言えばアルバイト優先」（46.8%）、「アルバイト優先」（26.1%）とボランティア活動よりもアルバイトを優先する大学生の方が圧倒的に多い。

それでも大学生はボランティア活動をする（した）。上記の報告書によると、ボランティア経験がある学生は全体の40.7%にものぼる。そして現在ボランティア活動に参加している大学生の半数以上、52.0%が自発的な意志によって参加している。その動機として「困っている人を手助けしたい」（39.1%）、「新しく感動できる体験をしたい」（33.0%）、「新しい人と出たい」（30.9%）、「地域や社会をより良くしたい」（22.4%）、「自分のやりたいことを発見したい」（21.3%）などがあげられている。だが、この報告書では、どうしてボランティア活動が続けるのか、という点については言及されていない。様々な思いによって突き動かされ、参加したボランティア活動は、刹那的なもので

あったのだろうか、永続的なものであったのだろうか。

ボランティア活動には、退屈な日常に降って湧いた非日常、震災や事故などの被災地ボランティア活動がある。吉田竜司（1999）は1997年に起こった日本海重油流出災害における長期ボランティア活動から、被災地という非日常時空間、長期滞在という共同性にある「遊」の面、「コムニタス」を見出す。日常生活の様々な属性から離れ、非日常空間で遊び、楽しみながら社会的に認知された共通の目標に向かって、宿泊食事などの経済的不安もなく一定期間共同生活することは、ボランティア活動を継続することによって大変恵まれた要因になるだろう。

それでは、“被災地”という非日常的空間において長期滞在しながら継続するボランティア活動でも、単発的なイベント参加的ボランティア活動でもなく、日常の延長線上の小さな差異のなかで、生活サイクルの一つとして、どうしてボランティア活動が続けることが出来るのだろうか。外国人支援ボランティア活動を事例として、そこで活動を行う彼ら／彼女たちはどうしてボランティア活動を継続できたのか、あるいはできないのか、彼ら／彼女の意味世界を通して考えたい。

4. ボランティア活動の社会的背景

ボランティア活動が増加している社会的背景については、人々がボランティアに何を求めているのかについて考える必要があるだろう。ボランティアとは何かについては、前章で述べたように、入江（1998）の定義や大東（2002）のイメージに対する調査研究がある。これらの分析をふまえ、大東・柴田・湯川は学生のボランティア活動に対するイメージについて調査を行い、学生のボランティア活動に対するイメージが「自己実現」という特徴を帯びていることを明らかにした（大東・柴田・湯川 2004）。この

「自己実現」という特徴は前章において、また本共同研究で新矢・渡邊（2004）も述べているように、震災ボランティアにおいて、また特に若者たちのボランティアにとって重要と思われるイメージである。こうした「自己実現」というボランティア・イメージが現実にあるとすれば、それを生み出している社会的要因は何だろうか。

このボランティア活動に対する関心、特に学生がボランティア活動によせる関心は、高度成長期以降の学生の活動の変容として考えることができる。千葉芳夫（1997）は1960年代の全共闘運動を豊かな生活を可能にする文化や教育が外から与えられる管理社会に対する反抗として捉えているが、現在の若年層は豊かな管理社会に掘め取られていると分析する。この若年層は豊かな管理社会の中で満足しきっているわけではなく、社会に不満もあるが、積極的に変えていこうとする意欲もないと言う。ボランティア活動は若年層特に学生にとっては、こうした社会的な不満を彼らなりに変えていこうとする活動であるかもしれない。

また千葉は不満はあるが意欲もないという若年層の二重意識性を、アイデンティティの確立の困難さというマイナスの側面と反管理社会的な価値観の存続というプラスの側面としてみる。アイデンティティに関しては、新矢・渡邊（2004）にあるように、また近代社会を自己に課された再帰性と捉えた Giddens（1992=1995）にあるように、近代社会では理想とされたアイデンティティの確立を獲得しなければならないのであるが、このアイデンティティの確立という「自己実現」のためにボランティア活動が行われているかもしれない。そのとき、1章で述べたような、いろいろな人と出会いたいという「関係性」という概念が重要なボランティアの要素である可能性がある。2章で述べたように災害ボランティアに群がる学生たちはこのような要因をたぶん持っているのかもしれない。

注

- 1) なおボランティア活動を側面から支えたものに国際ボランティア年の存在もある。1997年に国連総会において2001年をボランティア国際年とする決議が採択されている（『国民生活白書』2000）。
- 2) この調査活動は、平成15年度佛教大学特別研究助成「ボランティア・社会奉仕活動がこれからの社会や個人に与える影響」（代表：大東貢生）によって行われている。現在データ収集中であり、別途調査結果および考察を行いたいと思う。
- 3) ボランティア活動経験のある学生のデータのみを抽出した。

文 献

- Giddens, A., 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press. (=1995, 松尾精文・松川昭子訳, 『親密性の変容』而立書房.)
- 原田 隆司, 2000, 『ボランティアという人間関係』世界思想社.
- 入江 幸男, 1999, 「ボランティアの思想」内海成治・入江幸男・水野義之編, 『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社.
- 金子 郁容, 1992, 『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波新書.
- 大東 貢生, 2002, 「当事者の考えるボランティア」古川秀夫編著『現代日本のボランティア像』龍谷大学国際社会文化研究所.
- 大東貢生・柴田和子・湯川宗紀, 2004, 「ボランティア・イメージと活動経験の連関性」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要 第6号』龍谷大学国際社会文化研究所.
- 新矢昌昭・渡邊秀司, 2004, 「ボランティアにおける「わたらしいわたし」ーボランティア活動に対するいくつかの視角Ⅱー」『佛大社会学第28号』佛教大学社会学研究会.
- 千葉 芳夫, 1997, 「若者の高度成長ー若者文化とユートピア」鈴木正仁・中道實編, 『高度成長の社会学』, 世界思想社.
- 興梠寛, 2003『希望への力 地球市民社会の「ボランティア学」』光生館.
- 吉田竜司, 1999, 「遊びと稔ぎのあいだー「重油災害ボランティアセンター」における長期一般ボランティアの社会的世界」富山大学環日本海地域研究センター『ナホトカ号沈没に伴う日本海沿岸地域への被害に関する社会経済的・生態的影響調査

－1999年日本海経済白書－』 富山大学
環日本海地域研究センター，106-152.

財団法人内外学生センター，1998，『学生のボラン
ティア活動に関する調査』財団法人内外
学生センター．

【付記】

本稿は，平成15年度佛教大学特別研究助成
（代表：大東貢生）による研究成果の一部である。

（とみかわたく
佛教大学大学院社会学研究科博士課程）

（ゆかわむねき
龍谷大学大学院社会学研究科博士課程）

（しんやまさあき
佛教大学総合研究所研修員）

（おおつかたかお
佛教大学社会学部社会学専任講師）